

— 創才 —

子どもたちの才能を創る

平成二十八年五月十二日、函館ロータリークラブ例会にて、当会事務局長の舩矢が行った講演に加筆し、編集後記に代えることといたします。

北海道創才教育推進会は「創才セミナー」というセミナーを開くことを中心に活動しております。

「創才セミナー」は毎年八月に大沼国際セミナーハウスで行うもので、主に小中学生を対象として、算数・数学のおもしろさや楽しさを実感しながら学べるセミナーです。

「創才」という言葉は、「秘められた才能や興味を発見し、創り育てること」を意味します。これは世界的な数学者の広中平祐先生が作られた言葉です。

● 広中先生と「創才」の歴史

広中先生は、昭和六年（一九三一）生まれで、数学のノーベル賞と呼ばれるフィールズ賞や文化勲章を受章され、国内外で活躍されてきた数学者です。昔から若い世代の才能を育てることに大変熱心に取り組まれてきました。昭和五十年代にテレビに時々出演して、若者と熱心に語り合っただけでなく、私は何度か拝見して、深く感銘を受けました。

また、広中先生は一九八〇年代に「湧源郷構想」

というものを発表されました。これは、世界に開かれた画期的な大学を地方に開設して、新しい時代を切り開く人材を育てると共に、その地域を活性化することを目指す構想です。その考えに、函館の書道家で当会の前会長であった故中島莊牛先生（三年前に逝去）が感銘を受け、函館圏に新大学を誘致する運動を始めました。

その運動を進める母体となったのは函館圏湧源教育構想推進会で、故藤岡敏彦先生を会長として、会員数が地域の個人・団体を合せて一、三〇〇名に達しました。その熱心な運動の流れから公立はこたえて未来大学が創設されました。

その後、広中先生は小中学生が楽しく学びながら才能を伸ばすことができる算数・数学のセミナーを開きたいと考えて、それに賛同した中島莊牛先生や、大学誘致運動に関わった方々を中心として発足したのが「創才教育推進会」です。

第一回の創才セミナーは、今から丁度十年前の平成十八（二〇〇六）年に開催されて、最初の五年間は「全日本小中学生創才セミナー」として、数理科学振興会と算数オリンピック委員会と共催で、道新文化センターの協力の下に行われました。ここでは、算数オリンピック大会で優秀な成績を収めた子ども達と地元の子ども達と一緒に学んだり、ゲームをしたりしました。その後二〇一一年の東日本大震災をきっかけに、当会が単独で開催することになり、今に至っております。

● 創造性を伸ばす教育とは

さて、私たちの地域や日本という国全体の将来を考える時に、未来の主役となる子ども達をどう教育するか、また、私たちが自分自身をどう教育して、若い世代に何を引き継いでいくか、ということが大きなテーマになって来ると思います。

広中先生を始め、創才セミナーに関わってくださった先生方は、皆さん教育に大変熱心で、教育について深い智慧に満ちた言葉をたくさん語っていらっしゃいます。これからそうした貴重なお言葉をいくつかご紹介したいと思えます。

第一回創才セミナーの際に、開催を記念して広中先生と中島前未来大学学長の対談が行われまして、その中で広中先生はこんなことをおっしゃっています。「クリエイティブであろうとすると、三つのことが必要になります。一つは動物的な直観力。もう一つは情報社会に生きるための基本的な知識。そして三つめが性格、つまり難しい場面を乗り切る強い意志とか、これだと思った時にやり遂げる集中力などです。」

とりわけ直観力と知識のバランスは大切で、知識を詰め込むことで直観力を鈍らせてはいけません。ということですね。それに応じて中島前学長も「小中学生は不思議に思ったことを素直に口にします。これに対して知識で答えることは簡単ですが、子どもの感性を壊さないように直感的に答えることは非常に難しいです。」とおっしゃっています。

広中先生によると、「算数オリンピックに参加し

ている小中学生は理屈で問題を解いているわけではない。子ども達は方程式や公式を知らないにも関わらず答えを出してしまう。それは、なんとなく「これらしい」という感覚があるから。」ということです。そして「そういう感覚を伸ばしてあげたい」とおっしゃっています。

中島先生は「子どもの興味や関心を、親がつぶさなければ教育は成功でしょう。何かに興味を持った子に対して、それを素直に支えて伸ばしてあげることで教育の原則だ」とおっしゃっています。その手段の一つとして、良い本を与えることは効果的で、子どもが興味を持っている分野なら少し背伸びした内容でもいい、ということですよ。

● 広中先生が受けた教育

広中先生の生い立ちを知ると、先生ご自身がお母さまから、こういう原則に則った教育を受けたと言えます。と言っても、広中先生は手塩にかけて英才教育を施してもらった、というわけではありません。広中先生のご両親は再婚同士で、十五人兄弟だったため、とても手塩にかけるどころではありませんでした。とにかく最悪の事態さえ避けられない、例えば怪我をしても死ななければいい、成績はよくなくても学校へ通ってさえいければいい、偉くならなくても、人を傷つけたりさえしなければいい、という自由放任だったそうです。

先生のご両親は小学校しか出ていませんでしたので、インテリとは正反対の方でした。広中先生は五歳くらいになると、「お風呂のお湯の中ではどうし

て手が軽くなるの」とか「目はこんなに小さいのに、どうして大きな家や広い景色が見えるの」とか、様々な質問をしたそうです。でもお母さまは知識がないのでほとんど答えられません。ところがその時、「わからない」とは言いませんでした。また「そんなこと、大したことないから考えなくていい」とうるさがることもませんでした。「さあ、どうしてじゃろなあ」と首をかしげて、しばらく考えようとしたそうです。でもわからない。そこで、近くの神社の神主さんとか、お医者さんのところに行つて「この子がこんなことを尋ねているのだが、ひとつ説明してやってください」と頭をさげたそうです。そうすると「おもしろい質問じゃないか」と言つて答えてくれる。広中先生はわからないながらも「おもしろい話聞いたな」と思つて帰つて来る。このような経験を繰り返すうちに、子ども心に「ものを考えることは考えること自体に意味がある」と知つたそうです。「母から考えることの喜びを身をもって教わつた。学者としてだけでなく、一人の人間としての私にも、このことは何にも代えがたい精神的財産となった」とおっしゃっています。

● 最後に物を言う感受性とは

この座談会には中垣俊之先生も参加されました。中垣先生は、単細胞生物である粘菌が迷路を解く、という研究でイグ・ノーベル賞を受賞されて有名になった方です。先生はこんなことをおっしゃっています。

「学生が卒業研究をする時に、小学校からの勉強の、ある種の集大成がそこで成されます。その時に生き生きとして、とてもおもしろいことをやって、創造性を発揮する人と、全然そうじゃなくなる人との違いが、割とはっきりあるんです。その違いはどこから来るのか。と考えると、それは、「頭がいい」ということは全く別の何か、素養というものがあると思うんですね。それは「そのことをやっていておもしろい、もうそれだけで生きていてよかった」というような感受性だと思ふんです。それが大いに育まれている人というのは、大学の試験を落ちたとか、身分不安定な研究員を五年、十年やっていても、それほど不幸な感じはないし、元氣さも失わないんですね。だから、感受性のようなのが、やはり最後のところで物を言うかな、と思つているんです。」とおっしゃっています。

子どもたちは成長するにつれ、色々な困難にも遭うでしょうが、その時、中垣先生がおっしゃるような感受性が、困難を乗り越える力の源となるはずですよ。「そのことをやっていておもしろい、もうそれだけで生きていてよかった」と思えるような感受性を育てあげると、ということが、大人が子どもにあ

て手が軽くなるの」とか「目はこんなに小さいのに、どうして大きな家や広い景色が見えるの」とか、様々な質問をしたそうです。でもお母さまは知識がないのでほとんど答えられません。ところがその時、「わからない」とは言いませんでした。また「そんなこと、大したことないから考えなくていい」とうるさがることもませんでした。「さあ、どうしてじゃろなあ」と首をかしげて、しばらく考えようとしたそうです。でもわからない。そこで、近くの神社の神主さんとか、お医者さんのところに行つて「この子がこんなことを尋ねているのだが、ひとつ説明してやってください」と頭をさげたそうです。そうすると「おもしろい質問じゃないか」と言つて答えてくれる。広中先生はわからないながらも「おもしろい話聞いたな」と思つて帰つて来る。このような経験を繰り返すうちに、子ども心に「ものを考えることは考えること自体に意味がある」と知つたそうです。「母から考えることの喜びを身をもって教わつた。学者としてだけでなく、一人の人間としての私にも、このことは何にも代えがたい精神的財産となった」とおっしゃっています。